

第 29 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

2003 年 10 月 23 日、札幌市内で開催された第 1 回委員会で、新・旧委員の引継をした後、新任委員の互選により主査を選出、応募要項、審査手順等の確認を行った。12 月 16 日の第 1 回審査会で、本年度の審査対象作品を、応募全作品 11 点に、支部主催「建築作品発表会」発表作品から委員により推薦された 6 点を加えた計 17 点とし、第 1 次書類選考が行われた。

その結果、現地審査を含む 2 次審査対象作品として、以下の 10 点が選出された。(1)札幌コンベンションセンター (吉田宏、菅原秀美/㈱北海道日建設計、小林英嗣/北海道大学)、(2)豊富町立豊富中学校 (齋藤文彦、小倉寛征/㈱ドーコン)、(3)F 邸 (福田真司/㈱久米設計、本井和彦/㈱竹中工務店)、(4)真駒内六花亭ホール(古市徹雄/㈱古市徹雄都市建築研究所)、(5)I S (渡辺真理、木下庸子/設計組織ADH)、(6)GLASS PYRAMID (川村純一、堀越英嗣、松岡拓公雄/アーキテクトファイブ)、(7)エコ・ミュージアムおさしまセンター (保科文紀、船場俊星/㈱アトリエ ブンク元所員、和田敦/㈱アトリエブンク)、(8)こぐまの森プレイホール ガリバー (小西彦仁/㈱ヒココニシ設計事務所)、(9)ザ・ウィンザーホテル 洞爺チャペル G-CLEF (川村純一、堀越英嗣、松岡拓公雄/アーキテクトファイブ)、(10)月寒の家 (川人洋志/北海道工業大学、菊池規雄 /WANDER ARCHI) <以上、順不同>

その後、2004 年 3 月 31 日の最終審査会までに、上記 10 作品を少なくとも 3 名以上の委員が現地で審査、その結果を最終審査会にもちよった。予め主査 から各委員には推薦する作品 2～3 点を選考しておくことが要請され、最終審査会の協議にあたって開示されたが、少なくとも一人の委員から推薦を受けた作品 は、上記 10 点のうち、(2)豊富町立豊富中学校、(4)真駒内六花亭ホール、(5)I S、⑥GLASS PYRAMID、(7)エコ・ミュージアムおさしまセンター、(8)こぐまの森プレイホールガリバー<以上、順不同>の 6 点であった。以後それらを審査 の主な対象とした。

続いて各作品についての推薦理由、疑問点などを確認しつつ選考作業を進めた結果、3 名以上の委員から推薦のあった作品(2)、(4)、(6)、(7)に 選考対象が絞られた。しかし、ここから最終的な結論を得るまでには長い議論を要した。本建築賞選考にあたっての評価規準は、作品がもつ「先進性」「規範性」および「洗練度」とされている。しかし、そうした共通軸で見てもなお、作品に対する委員の評価は分かれた。議論は白熱、予定した時間では結論に至らず、会場を移して審議が続けられた。

特に、本賞、特別賞候補として議論の的となった「真駒内六花亭ホール」と「GLASS PYRAMID」

については、共に一定の水準を超えた作品であるという点で異論はなかったものの、授賞対象とすべきか、あるいはどのような賞が相応しいかと言う点で意見が分かれた。前者については、菓子店舗と音楽ホールという対立する機能を随時転換可能にした計画のアイデア、地域の文化活動拠点として根付いている事実や洗練されたデザインを高く評価する委員と、配置計画(特に駐車場の扱い方)等、周辺環境との関係性に疑問を呈する委員との間で長い議論があった。また、後者については、彫刻家の故イサム・ノグチが札幌市のモエレ沼公園内の中核施設として、そのマスタープランに模型やスケッチで提案していたものであり、「彫刻の建築化」いやや特殊な状況をどう評価すべきかが論点になった。

最後は出席委員の表決を問うことになったが、彫刻家とのコラボレーションの中から「ランドスケープとしての建築」という新たな方向性を探りつつ、アースワークを基盤に、従来の建築の枠組みを越えようとした姿勢に多くの共感が集まった「GLASS PYRAMID」を審査員特別賞とした(因みに筆者は、こうした議論の内容が直接何らかの形で公開あるいは公表できたなら、学会のみならず、広く建築界の活性化や一般市民の建築や環境に対する関心を高める上で大いに意義あるに違いないと考えるものである)。

一方、奨励賞を受けた2作品については大方の委員に意見の一致を見た。「町立豊富中学校」は、地域コミュニティの核としても機能する中学校を、ユーザーからの多様な要求を調整しながら、中庭を囲むコンパクトな教科教室型校舎にまとめた作者の力量が高く評価された。また、「エコ・ミュージアムおさしまセンター」も、小規模ながら、地元彫刻家のアトリエであった元小学校校舎を改修し、「時間(とき)の記憶」を定着させた施設計画が今後の公共施設整備手法の好事例になると思われた。

今回は受賞を逸したが、現地審査の対象となった他の作品もそれぞれ質の高い建築であった。3点の住宅作品にもチャレンジングな試みが見られた。中でも「IS」は、南面する吹き抜けの大開口部にガラスと障子のダブルスキンを設け、室内環境の調整を図った手法に可能性が感じられた。しかしこれが寒地住宅の一つのタイプになり得るかどうかを判断するにはもう少しばらばら<時間>の検証が必要であろう。「こぐまの森プレイホール」は、幼稚園児の身体と精神活動に刺激を与える空間装置として、変化のあるスケール感と素材選択の的確さに作者の資質が感じられたが、やや、生硬な印象もあった。厳しい条件下、クライアントの夢に確かな空間で答えた「月寒の家」、テクノロジーに依存しすぎた嫌いがある「F邸」も力作ではあったが、他の候補作に比し、規範性という点では相対的な訴求力に欠けた。「札幌コンベンションセンター」は、多目的機能を果たす大型施設であり、随所に挿入された中庭が空間の分節によく効いてい

るが、多用途である故か、スケール上の曖昧さが否めない。「G-CLEF」も、軽やかな空間を生み出しているが、建築の社会的な意味あるいは規範性と言う点ではやや説得力を欠いた。

最後になったが、本表彰制度の創設と運営に多大の貢献があった北海道大学名誉教授・太田実先生がこの3月逝去された。先生がこの事業に込められた思いを今後の学会活動にも生かして行くことを肝に銘じ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(文責：大矢 二郎君)

第 29 回 北海道建築奨励賞

齊藤 文彦 君 小倉 寛征 君 「豊富町豊富中学校」の設計

豊富町立豊富中学校は、地域に開かれた活動を持つ教育施設である。実現のプロセスの中で、設計者の果たす役割と成果を強く感じることができる建築として評価したい。豊富町立豊富中学校は、プロポーザル方式の選定方式で設計者が特定された。条件の中では、住民参加型の設計プロセスをふむことが前提とされていた。利尻富士岳を望む、町の周縁部「緑のふちどり」に位置する教育高齢者福祉拠点の中心施設としての計画が求められた。

系列別教科教室型の中学校としての空間構成の新しい試みも求められた。系列別の教室とホームベースが階に分節され配置される。何よりもテーマとなっているのは、教室を移動する空間の在り方である。使い手側の学校、生徒、地域住民と設計者の深い議論がなされたことが感じられる。結果としての中庭型の平面計画、サーキュレーションすることのできる中庭をめぐる導線が成功している。参加のプロセスが新しい形式のオープンスペースを多く持った教科教室型の中学校としての豊かな空間利用、生活空間の楽しさの創出に結びついている。それぞれの教科教室が、個性を持った豊かな空間に生まれ変わっていく兆しも感じることができた。施設は教育施設であるとともに地域に開かれたコミュニティ施設としての性格を持っている。利用時間や、利用動機をフレキシブルに使い分けのできる明快な平面計画となっている。

体育館は、楕円のフォルムを持つ大きな空間である。鉄骨のハイブリッドトラスは大空間の主要構造であると同時に、活動空間としての動きのある軽快な空間を構成する大きな要素になっている。四季、とりわけ冬期の気候の厳しい地域の活動スペースとして、ランニングトラックが、楕円の平面計画と整合している。形態的にも主張しすぎずに適度な躍動感のあるフォルムを構成している。

音楽室は、利用者側の多様な動機や使われ方としての意志が反映された多目的に利用される魅力的な空間となっている。

この中学校には、生徒、教職員合わせて 200 名程の程よい密度の施設として心持良さがある。中学校というデリケートな時期を過ごす空間の構成と質が、荒れ始めていた学校の質を変えたという生徒、教職員、地域住民の評価は、創み出された建築空間の質とその実現プロセスに依るところが大きい。

雄大な利尻富士を望むサロベツ原野に対し、中学校という性格をあまりにニュートラルに捉えすぎに思える建築に対する答え方、空間のディテールや、素材の選択など、コストのしぼり

の大きい施設の中での格闘は見て取ることができるが、若干のもの足りなさを感じた。これから増設される給食施設やグラウンド、外構計画などの完成を楽しみにしたい。

(文責：鈴木 敏司君)

第 29 回 北海道建築奨励賞

保科 文紀 君 和田 敦 君 船場 俊星 君 「エコ・ミュージアムおさしまセンター (アトリエ 3 モア)」 の設計

延床面積約 400 m²の小さな増改築である。彫刻家砂澤ビッキが使用していた住居兼アトリエが、彼の記念館として再生された。元来この建物は旧箴島小学校校舎として昭和 10 年に建設されたものであり、70 年近い長い年月を経ている。増築はわずかにエントランスを含めた下屋部分に止め、建物の原形がほぼそのままの形で残されている。

日本の最北端に近い音威子府村は、北海道において最も人口の少ない村であり、冬期の厳しい豪雪地帯としても知られる。四方を山に抱かれ、集落というにもいささか寂しいほどにわずかに住居などが点在する風景の中に、納屋か何かのように素っ気なく溶け込んでこの建物はあ

る。

小さな増改築ではあるものの、それ自体は一般的には決して保存対象とはならないであろう質素な建物を対象としながら、地域の小学校としての記憶をも残しつつ、強烈な個性を放ったビッキの記念館としていかに再生させるかという、難しいプログラムであったと思われる。ここでは小学校校舎としての平面をビッキのアトリエを含めて基本的に残しながら、展示空間としてのサーキュレーションをまず作り出している。廊下や教室等というプロポーションの大きく異なる空間の強弱を利用しつつ、各々にビッキの作品に対応した多様な空間がつけられている。素材はビッキの愛した木を主として、適所に鍍鉄板が用いられるだけに限定され、ビッキの思想と作品とに向き合う陰影ある空間となっている。一方で、例えばかつての子供達の残した落書きなども小学校の記憶として残されており、どこまでが保存され、また新たに手を加えられたのかが半ば判然としないかのように、ある種曖昧な状態として全体が成立している。

一般に増改築において建築家は、残すべき既存部分と新たに手を加える部分とを明確化することによって、対比と調和との振幅の間において、その関係性を強く表現しようとする傾向にある。それは増改築という条件での、建築の新たな形式や手法を発見していく上での必然でもあり、そこに我々は設計者の思考を容易に読み取ることができる。このような観点から見れば、ここには改修に対する建築としての強い形式や表現があるとは決して言えないかもしれない。しかしここでの設計者は、既存の状況を丁寧に読み込み、決して過剰にならずにさり気なく各々の部分に手を加えることによって、小学校とビッキという二つの記憶に柔軟に応える全体をつくり出すことに成功しているように思われる。

様々な条件においての、建築家の関わるスタンスについて再考を促すような小品である。

(文責：山田 深君)

第29回 北海道建築賞審査員特別賞

川村 純一 君 堀越 英嗣 君 松岡 拓公雄 君 「モエレ沼公園 ガラスのピラミッド」の設計

長い年月をかけて少しずつつくりあげてきたプレイグラウンド、アースワーク。これが「ガラスのピラミッド」の背景に存在し、この建築に特別な意味を与える。建築が先にあるのではなく、ランドスケープの中の一要素として建築が存在する、今までの建築と狭い意味での外構という関係ではない。そのことがかえってこの作品の新しさとして感じられる部分になっている。

それは、空間の構成によって明らかになる。建築としての機能諸室は、GL+6mレベルの台地の下に配置され、GLと同じレベルのエントランスから公園の動線の一部としてアトリウム、アトリウム内のGL+6mレベルの人工地盤的な広場、さらには上階の展示空間や公園を一望する屋上展望スペースへの連続性によって、様々な発見的体験を人々にもたらす。このことは、この作品の優れて評価すべき部分であり、建築がランドスケープの中で存在することによって表出する空間の連続性や空間という物的要素をデザインするだけでなく、その中で展開されるアクティビティ自体をデザインするという新たな建築デザインの方向性を示している。

形態と素材についても大きな特徴がある。非線形な彫刻的形態を持つガラスのピラミッド部分は、見る角度によって違うかたちに見える。1つの方向からの視線を意識してつくられたのではなく、公園という回遊動線の中で様々な視線から形を変えながら意識されるという狙いが見事に実現している。それが周辺のモエレ山、中央噴水などと呼応しながら1つの風景をつくりあげている。この変化は、外観だけではない。南面の斜めのガラス部分から差し込む光は、アトリウムの1F吹き抜け部分に柔らかく降り注ぐ。それに対し、アトリウム2Fの広場に面した北側の垂直なガラスを通して見えるプレイマウンテンなどの光景は、広大な公園に1つのフレーミングをしたようにシャープな風景を切り取ってみせる。このように1つのアトリウムに2つの異なる場が組み合わせられて設けられ、それが一体につながっているところがこの作品の魅力である。一方、建築を構成する素材の使い方についても特徴がある。非線形のガラスのボリュームに貫入する変形直方体には黒発色ステンレスパネルが用いられている。この組み合わせは、「あわせ」と呼ばれるイサム・ノグチのモチーフの具現化であり、ガラスとステンレスパネル、さらには庵治石積みといった異なる素材が直接的にぶつかりながらつくられるコンポジションは、建築的な修辞とは異なった固有の場の感覚をつくり出し、それが従来の建築作品にはない芸術的感動を与えている。

建築がもっとも輝いて見えるのは、環境を含め、その建築にまつわる社会と、そこで活動する人々と共に活力ある行動を包容する姿全体が、体験する私たちに ある種の興奮をもたらすときだろう。建築を生み出すプロセスにおいて、「未来の子どもたちのために」というイサム・ノグチの意志が実現していくのを見るにつけ、現代の社会が建築に対してこのような力を求めているということがわかる。新しい人々集まりが新しい風景をつくりあげるのである。この作品の持つこのような建築の新しい方向性は、真に評価されるべきである。

(文責：小篠 隆生君)